

シュマルゾウ芸術学の哲学的源泉

——十九世紀における運動と演算——

金田 千秋

第一節 はじめに

本研究の目的は、アウグスト・シュマルゾウ (August Schmarsow, 1833-1936) が二十世紀初頭に提示した独自の芸術学について、その哲学的源泉を明らかにすることである。取り上げる彼の著作は『芸術学の基礎概念』 (*Grundbegriffe der Kunstwissenschaft am Übergang vom Altertum zum Mittelalter*, Leipzig und Berlin, Teubner, 1905.) であり (以下『基礎概念』)、理論的哲学的内容を含む冒頭の諸章を重視する。

『基礎概念』は、「運動」概念のうえに芸術理論を構築した点で、近代美学史において異彩を放っている。十九世紀後半から二十世紀初頭への世紀転換期は、芸術の哲学的研究には事欠かないが、運動の側から芸術に取り組んだ例は珍しく、そこにシュマルゾウ芸術学の画期的意義を見るのが大方の研究者の共通認識である。私がシュマルゾウについて立論するのは、あの時期にあの運動論的芸術論が生まれた、その理由が知りたいからである。

第二節 シュマルゾウの哲学的素養

シュマルゾウの学位論文を知っているだろうか。彼は一八七〇年代後半に、シュトラースブルク大学でエルンスト・ラーズ (Ernst Laas, 1837-85) 教授のもとで哲学を学んだのだが、一九二四年に当時に回顧してこう述べている。「私は学問への取り組みについてラーズ教授から生涯にわたる影響を受けた。その演習はプラトン、アリストテレス、ライプニッツ、ロック、ヒューム、スコットランド学派、ジョン・スチュアート・ミルに及ぶものであった」と(1)。カントが落ちていいるが、カント関係の指導も行われたと考えて差し支えあるまい。なぜならラーズの主著(2)はカントに関するものであり、彼が指導上、カントを排除する理由が見当たらないからである。

一八七七年、シュマルゾウがラーズに提出した学位論文の表題は *Leibniz und Schottelius* である(3)。シヨテリウス (Justus Georg Schottelius, 1612-1678) は三十年戦争後に活動した愛国的なドイツ語改良家であるが、筆者不詳とされていた一七一七年刊行の文書「私

見 (Die Unvorgreiflichen Gedanken)」について、シュマルゾウはそれがライブニツではなくシヨテリウスに帰属すると推定したのである。ただ今日この結論は覆されていて、一般に「私見」はライブニツの真正の文章とされる。

私が通例無視されるシュマルゾウの学位論文に言及したのは、彼が哲学の専門知識を有することを示したからである。専門性を欠いてはライブニツで、シュトラースブルク大学で学位は取れない。ラーズ一門は学問的水準が高く、のちに『純粹理性批判のコメンタール』で有名になるカント学者ハンス・ファイヒンゲル (Hans Vaihinger: 1852-1933) も、当時同じ研究室に在籍し、七七年には同教授のもとで学位を取っている(一九一一年に『かのよりの哲学』(Philosophie des Als-Ob, Leipzig, Felix Meiner)として刊行されたものの原本)。その同じ研究室に哲学徒たる青年シュマルゾウがいたのである。『基礎概念』にもその片鱗は伺えるが、彼の哲学的能力は美術史家としては並外れて高く、その能力を侮るとシュマルゾウ芸術学の本質を誤認する可能性が高い。ただ美術史学への転向の経緯だけは、資料的にもうひとつはつきりしない。

さてそのライブニツには一六七九年の書き込みのある『幾何学的記号法』(Characteristica Geometrica)』と題する手稿がある(4)。その中で彼は幾何学全体、つまり定理だけでなく公理まで含めて、すべてが「運動 (motus)」概念で証明可能だと主張している。工作舎版『ライブニツ著作集』第一巻の編者澤口昭章はそれを、ライブニツ幾何学の原始概念は「運動」であり、空間や点は運動を構成する付随的契機だったとの確に要約している。

すでに十九世紀中葉にはゲルハルト版ライブニツ全集が世に出て

いたのだから、当然、一九〇五年の時点でシュマルゾウはこの遺稿にアクセスすることが可能であった。私はライブニツの『幾何学的記号法』あるいはその周辺の遺稿群が、シュマルゾウ芸術学の第一の哲学的源泉ではないかと睨んでいる。なぜなら、「芸術学のすべての原理と命題を運動概念に帰着させるシュマルゾウの企て」と、「幾何学のすべての公理と命題を運動概念に帰着させるライブニツの企て」は、分野こそ違え、基本構想において寸分違わず一致するからである。

第三節 アドルフ・トレンデレンブルク

シュトラースブルク大学でシュマルゾウの指導にあたったエルンスト・ラーズは、ベルリン大学でアドルフ・トレンデレンブルク教授(1802-1872)に哲学を学んだ人である。トレンデレンブルクはいまや忘れられた存在だが、十九世紀中葉のプロイセンの大学やギムナジウムの哲学教師で、彼の名前を知らない者はいない。高級文部官僚であり、その口頭試問に合格しなければ、この国で哲学の教鞭は採れなかつたからである。彼が生涯でこなした面接は優に七百回を超える。その主著である『論理学研究 (Logische Untersuchungen)』(1. Auflage, Berlin, Bethge. 1840; 2. Auflage, Leipzig, Hirzel. 1862; 3. Auflage, Leipzig, Hirzel. 1870. 金田は第三版を使用)は十九世紀中葉のプロイセンの代表的哲学書であるが、同時に教員採用試験対策の参考書として広範に読まれた形跡もある。そしてラーズを間において、シュマルゾウはそのトレンデレンブルクの孫弟子に当たるのである。シュマルゾウの一八七七年の学位論文にもその名前は出てく

るし、彼が『論理学研究』に眼を通さなかったとは到底考えられない。

トレンデレンブルクはドイツ語圏の哲学的司令塔であった。彼と何らかの接点を持つ人物を挙げると、R・H・ロツェ (1817-81)、W・ディルタイ (1833-1911)、F・ブレンタノ (1838-1917)、G・フレーゲ (1848-1925)、敵対的だがW・ローゼンクランツ (1821-74)、彼のヘーゲル批判に快哉を叫んだデンマーク人S・キルケゴール (1813-55) がいる。ほかにチェコのB・ボルツァノ (1781-1848)、R・フォン ツイツメルマン (1824-98)、E・ハンスリック (1825-1904) たちが、ヴィーン大学とプラハ大学の人脈を通じて、プロイセンの権力中枢にいたトレンデレンブルクと接点を持っていたと信ずる理由がある⁽⁶⁾。だがそれは当面の話題ではない。

ところで一八三一年は画期的な年であった。ヘーゲルの没した年、A・I・ベッカー (August Immanuel Bekker: 1785-1871) 編纂のアカデミー版アリストテレス全集の発刊の年、そして後で説明するが、マイケル・ファラデー (Michael Faraday: 1791-1867) がモーターの原理である電磁誘導現象を報告した年でもある。

一八四〇年のトレンデレンブルクの『論理学研究』は、一八三一年の三つの出来事と次のように意味深く繋がっている。

その一。『論理学研究』は最も早いヘーゲル批判書の一つである。二十年代、ベルリン大学の年長の同僚ヘーゲルから直々に、「うちのグループに入らないか」とオルグを受けたトレンデレンブルクは⁽⁶⁾、授業でヘーゲル哲学を公然と批判し、あまつさえ(ヘーゲル没後の)一八四〇年の『論理学研究』ではヘーゲル哲学の空疎性と無効性を痛罵している⁽⁷⁾。

多岐にわたるトレンデレンブルク哲学は安易な要約を拒むが、その本質を、すべてのカテゴリーは「運動」原理で究明可能だという洞察に求めても間違いではない。『論理学研究』全九三九ページは、認識から道徳にいたる全経験領域の、「運動 (Bewegung)」概念による解明なのである。なお彼を中心とする学派は「後期ドイツ観念論」と呼ばれることがある⁽⁸⁾。

その二。トレンデレンブルクはプラトンおよびアリストテレスの研究者でもあり、A・I・ベッカーやC・A・ブランデイス (Christian August Brandis: 1790-1867) との親交で知られる。プロテスタントの国の、中世スコラを経由しないアリストテレス研究の濫觴である。重要なことは、トレンデレンブルクがアリストテレス復興をドイツ観念論批判に結びつけたことである。例えばカントの、「認識は主観がカテゴリーを使って現象を読み綴った結果である、だが現象の根底にある物自体は知られない」といった主張を、彼は拒否する。主観は主観で、客観は客観で、それぞれ哲学的に解明可能であり、究極の原理すなわち「運動」が二つの課題を併行して解決すると主張するのである。しかしこの認識にアリストテレスの「キーネーシス」概念の残響を聞くのは正当である。なぜならアリストテレスでは、キーネーシス (運動) は、一方で魂の出来事の説明原理であると同時に (De Anima)、他方では物的世界の説明原理でもあったからである (Physica等)。トレンデレンブルクの哲学は、原理においては運動の一元論だが、世界観としては物と魂の二元論なのである。その三。美学と直接の関連はないものの、物理学における電磁誘導現象の発見は刮目に値する。それが「原理の相互交通」思想に通じているからである。やや立ち入って説明する。

トレンデレンブルクがカントのカテゴリー理論に向けた批判はこうである。「カントは関係のカテゴリーにおいて、内属性、因果性、相互作用の概念を横並び (nebenordnen) にしている。カテゴリーは相互排他的 (sich ausschliessen) だとし、ある概念は、そのいずれかではあっても同時に幾つかにまたがることはない、とカントは言う」。しかしカントに反対して、トレンデレンブルクはこう申し立てるのである。「内属性、因果性、相互作用のカテゴリーは排他的に区切られてはいない。内属的なものはほとんど常に因果的でもある」と。(いずれも『論理学研究』、三七五頁。)

要するにトレンデレンブルクは、あるカテゴリーは他のカテゴリーと相互に交通する、と言うのである。交通は私自身の言葉だが、彼はこの現象を、原理と原理の間の「翻訳 (übersetzen)」、「相互移行 (ineinander übergehen)」、「相互変換 (sich ineinander verwandeln)」、「相互交替 (sich ineinander umsetzen)」と表現している (『論理学研究』三七六頁)。私が本稿で指摘するのは、シュマルゾウ芸術学がトレンデレンブルクの哲学から「原理の相互翻訳」の思想を継承しているのではないか、という可能性である。

カテゴリーの相互翻訳、原理の相互翻訳という奇異に響くだろうが、十九世紀の人トレンデレンブルクにとってそれが奇異でなかったと考える理由がある。ファラデーの一八三一年の電磁誘導の報告から約半世紀後、イギリスのフレミング (John Ambrose Fleming, 1849-1945) は有名な左手および右手の法則を発表する (一八八八年)。中指で電流を、人差し指で磁界を、親指で力の方向を表すこの法則は、電磁誘導現象の才気溢れる直観化であるが、同時にそれは、ファラデーの一八三一年の発見が実は、互いに独立

な諸原理の相互翻訳可能性の発見でもあったことを、目に見える形で証明している。それはこういうことである。

トレンデレンブルクのいう「翻訳 (übersetzen)」とは、あるカテゴリーが元の何かを保存したまま別のカテゴリーに越境し、それでいて各々のカテゴリーの独立性は温存される、という意味である。ファラデーで言えば、「磁界と電流」は「力」に、「磁界と力」は「電流」に、「電流と力」は「磁界」に翻訳される (つまり元を保存したまま越境し、それでいて独立性は毀損されない)。十九世紀中葉から世紀末のプロイセンでは、すでに原理間の翻訳のイメージは、理科の教科書などを通じて社会通念になっていたのではないだろうか。(ちなみに、フンボルトやシュワッテリウスを見れば分かることだが⁹⁾、哲学が「翻訳」などの文芸概念を取り込むことは、なにも昨日今日始まったことではない。)

以上、駆け足ながら、トレンデレンブルクについて私は以下の三点を見た。第一に、「彼の哲学が運動を基礎概念とすること。」第二に、「彼の哲学がある種の二元論を内蔵すること。」第三に、「彼の哲学が基礎概念の相互翻訳の思想に開かれていること。」

そして私はシュマルゾウの芸術学が、トレンデレンブルクのこの哲学の影響下にあると睨んでいるのである。

ここで警戒すべきは、トレンデレンブルクとカントの関係である。いま挙げた三つの内容が「脱カント的」であることに留意されたい。実際、カントは運動を基礎概念として立てなかったし、カント哲学は二元論ではなかったし、カントはカテゴリーの交通を認めなかったのだから。

第四節 シュマルゾウ芸術学の脱カント的性格

総じて芸術学 (Kunstwissenschaft) が「カント的」であり続けたことに疑義はない。先陣を切ったK・フィードラーがそうだし、約半世紀後のE・パノフスキーの「現象意味—指示の意味—本質意味」の三項図式もまた、近年ディディ・ユベルマンが論断したごとく⁽¹⁰⁾、『純粹理性批判』の綜合 (Synthesis) 概念の美学的変奏なのである。E・ゴンブリチの図式概念もまた然り。

けだし「引いてみなければ線を考えることはできない、描いてみなければ円を考えることはできない」(『純粹理性批判』B154) というカントの呟きは、芸術学の無意識を構成する。

ここで本論文は後半に入る。私は先ほどトレンデンプルクにおける脱カント的な三つの要素を示したが、それを手掛かりとして、今度はシュマルゾウ芸術学の「脱カント的なもの」をあぶり出すことができる。すなわち第一に、「シュマルゾウ芸術学が運動を基礎概念とすること」、第二に、「シュマルゾウ芸術学がある種、二元論の性格を帯びること」。第三に「シュマルゾウ芸術学が基礎概念相互の翻訳の視点を持つこと」、以上三点を、順番を替えて (一) 運動、(二) 翻訳、(三) 二元論の順序で確認しよう。

(一) 運動

シュマルゾウの運動概念はトレンデンプルクを起源とする、と言いつけるだろうか。裏付けとなる資料もなく、歴史的証明は諦めざるを得ないが、『基礎概念』におけるシュマルゾウの最大の標的が

A・リーゲル (Alois Riegl, 1858-1905) だったとなると話は別である。状況証拠が使えるからである。

若き日のリーゲルがJ・F・ヘルバルト (Johann Friedrich Herbart, 1776-1841) の哲学を学んだことを示唆する資料が存在する。この資料に立てば、リーゲルの哲学的素養はヘルバルト系だという推定がまず成り立つ⁽¹¹⁾。

ところで一八六〇年代、トレンデンプルクとヘルバルト派が哲学上の論戦を交わしたことがある。その際、トレンデンプルクは「運動」概念を駆使してヘルバルト派を攻撃し、優位のうちに論戦を閉じたのであった⁽¹²⁾。

さてリーゲルがヘルバルト系の哲学を奉じていることを、シュマルゾウはおそらく知っている。ならば彼にとって、運動概念を前面に押し立てることには戦略的合理性があった。実際、私淑するトレンデンプルクがヘルバルト攻撃に使って勝利した武器を自分も使うことは、ヘルバルト哲学を受け継ぐリーゲル芸術学への攻略法としては理にかなっている。師と師の対立を、弟子と弟子がなぞるのである。

ところでシュマルゾウは『基礎概念』の第一章でこう言う。「リーゲルも「芸術創造の」始まりを自然科学的に、限定的には生理学的 (physiologisch) に導こうと考えていた」と(第一章段落八)。シュマルゾウはリーゲル同様、自分も生理学的方法を採ると言い、それでいてリーゲルと対決するのだから、シュマルゾウの攻撃はリーゲル生理学の至らぬ部分に向けられたに違いない。だがシュマルゾウの眼にリーゲル生理学のいったい何がいけないのか。

シュマルゾウはリーゲルにヘルバルト哲学の残滓を見ている。残

萍の最たるものはその数学主義である。たとえばリーゲルは点・線・面を構成するに際して、「点から線へ、線から面へ」という数学的順序をそのまま生理学的順序にしている。だがシユマルゾウによれば、これはユークリッドの方法を生領域に転用したもので、芸術論としては錯誤である（『基礎概念』第一章段落十五）。

そもそも美学の歴史を学ぼうとすればヘルバルトの空間論は必読である(13)。ヘルムホルツもリーゲルも、ヘルバルトを読まなければ根本が理解できない。ヘルバルトは一八二六年の『学としての心理学』で、空間的所与の心理学的構成を与えている。時間軸に現在をとり、過去が再生 (Reproduktion) という仕方 で現在に残す刻印を力学的な方程式で表し、その刻印の集合に積分もどきの演算を施すことで、人間の空間経験を説明しようとする。「再生」概念はたしかに興味深い。しかし数学的処理は当時から如何わしいとされ、それが今日ヘルバルトが顧みられない理由の一つともなっている。そしてシユマルゾウは、リーゲルがヘルバルト流の「数学主義」を脱し切っていない、と診断したのである。

ここで「運動」について若干補足する。シユマルゾウが『基礎概念』で使っているにも拘らず、本稿で私が触れない言葉が一つある。それは「身体 (Leib)」である。常識的には運動は身体の属性だろうから、「運動と身体」と言えば誰しも、事実の順序として身体が先行し、それに運動が付き従うと考えるだろう。そこから人がさらに、理論的にも身体論が先行し、それに運動論が続くと予想するのも自然ではある。しかし予想に反して、近代ドイツ語圏の哲学では、運動論の方が身体論に先行したという事実を私は指摘しておきたい。なによりもトレンデレンブルクがその証拠である。実際、十九世紀

プロイセンの哲学界を永きにわたって牛耳ったトレンデレンブルクの運動論のどこを見ても、「身体」は登場しない。そこで私は、まず始めにライプニッツやトレンデレンブルクの「身体なき運動論」が下部構造としてあって、それに「身体論」が十九世紀末に上部構造として後づけされた、そしてその意味で運動論と身体論の登場には時間差があったと考えるものである。本稿はその時間差の狭間、即ち身体概念抜きで運動論が論理的に成立し得た微妙な局面に眼を凝らしている。ただ紙幅の事情もあって、本稿では身体論の後づけの具体的経過に触れることはできない(14)。

(二) 翻訳

シユマルゾウ芸術学の基礎概念はシンメトリー、プロポーシオン、リズムであり、それぞれ水平、垂直、奥行きに対応する。私は今から、シユマルゾウがこれら基礎概念の間にトレンデレンブルク的な「相互交通、相互翻訳」を考えていたことを示そうと思う。

一九二〇年のシユマルゾウの思考実験は興味深い(15)。細い煙突状のドームに閉じ込められ、身動きがとれないとする。動けない以上、アクティブなのは垂直感覚だけである。だが首をそらせて煙突の開口部に視線をやると、彼方に夜空の星が見える。

理屈としては、その星は身体の垂直軸の延長線上に位置している。しかし実際には、その星は垂直性の価値ではなく「遠さ」という奥行き価値を帯びて見えている。そこでシユマルゾウはこう理解するのである。ここでは垂直性と奥行き性が媒介されている。垂直と奥行きとの二つの原理の間に相互翻訳が成立していて、しかも首の動きがその翻訳をつかさどっているのだ、と。

この認識はこう一般化できる。水平、垂直、奥行きは、各々独立の原理でありつつ、相互翻訳に対して開かれている。シュマルゾウの『基礎概念』の冒頭数章は難解だが、実は大半を占める基礎概念の相互翻訳の叙述が難解なのである。

ではシュマルゾウのこの「翻訳」思想の源泉は誰だろうか。ヘーゲルはどうだろう。彼は「量は質に転化する」と言わなかっただろうか。しかしシュマルゾウが尊敬してやまぬトレンデレンブルクとラーズがヘーゲルと敵対関係にあったことを思えば、ヘーゲル源泉説は到底採用できない。

電磁誘導に触れた箇所を確認したように、トレンデレンブルクは一八四〇年の『論理学研究』で、基礎概念の相互的な「翻訳、移行、変換、交替」を語っていた。トレンデレンブルクの影響力とシュマルゾウの人脈を考えれば、シュマルゾウに諸原理の「翻訳、移行、変換、交替」の視点を齎した者として、トレンデレンブルク以上の適任者は考えられない。

だが話は原理にとどまらない。一般に形象は諸原理によって構成される。しかし原理自体が翻訳的なことから、原理によって構成される形象も翻訳的な道理である。トレンデレンブルクの影響のもとで、シュマルゾウ芸術学は事実上、「形象から形象への翻訳、移行、変換、交替」という思想にも開かれていたと考えるべきだろう。

さて次の事実は要注意である。私はいまシュマルゾウ芸術学が「基礎概念の相互翻訳」という契機を含むことを見た。その意味でシュマルゾウ芸術学は「脱カント的」である。

ところで私が原理の相互翻訳と言うときの「相互」とは、「XからYへ」と「YからXへ」の双方向という程の意味だが、しかし

それは二方向が対等だということではない。実際、シュマルゾウは奥行きによって垂直および水平を基礎づけはしても、逆方向の基礎づけは語らないのである。彼にとつては奥行きが根源的である。

ここには優劣の関係が存在する。ところがシュマルゾウは優位にある奥行きを「継起性 (successive)」だけで、つまりカント風に言えば「構想力の継起的図式」で理解する。したがってシュマルゾウの『基礎概念』は、マクロに見れば何のことはない、カントのあの眩き、「引いてみなければ線を考えることはできない、描いてみなければ円を考えることはできない」に回帰するのである。シュマルゾウもフィードラー、パノフスキー、ゴンブリチのグループの一員なのだろうか。

しかしここがシュマルゾウ芸術学の要諦である。たしかにシュマルゾウの『基礎概念』の全体構想は「継起性」の支配下にある。しかしそこで行われる個々の論証を精査すると、やがて示すとおり、時間的で継起的な図式のほかに、それと異なるもう一つの図式が併用されていることが確認できる。そこで私はマクロとミクロを区別しつつ、こう主張するのである。シュマルゾウ芸術学は全体として、つまりマクロには、「カント的図式概念」に依拠するが、ミクロには、つまり「翻訳」をめぐる個々の論証の現場では、「非カント的図式概念」に依拠すると。ただしにこの事実の確認に取りかかろう。

(三一一) 三元論 (翻訳をつかやどる図式)

まずある原理が別の原理に翻訳可能であること、このことが個別に議論される局面に眼を向けよう。この議論は「図式」に沿って進行する。

シュマルゾウは『基礎概念』のなかで「図式 (Schema)」という言葉を使っていない。しかしそれにも拘らず彼は、トレンデレンブルクの影響のもとで、事実上ある「図式」概念を使用している。ただそれを示すには若干の準備が要る。

T・リップス (Theodor Lipps, 1851-1914) は『美学 (Ästhetik)』の第一巻 (1903) で、木が地面に (まるで意思体のように) 立っていると見える事実などを主観からの感情移入で説明したが、その説明に際して彼は二つの契機、すなわち「主観が木になる」という契機と、「木になったその主観が動く (立つ)」という二つの契機を区別している。さてシュマルゾウが「奥行き根源性」を語る次のくだりも、リップスと類比的に、二つの段階の区別に触れている (後で使うので、傍線と【】の二つの記号を入れる)。

「水平が実は奥行きの一形式であることを示すには」人は事物のところまで行って (heranbemühen)、自分をその事物に持ち込む (Übertragung) 必要がある。(中略) 人は自分自身の垂直線で客観を【走査 (Entlangfahren) する】。一方の端に自らの垂直線をあてがい (einsetzen)、徐々に他の端まで【滑る (gleiten)】。自らの主観を客観「垂直線」にゆだね (hingeben) ながら、しかし同時に【自ら運動を行う (selbst eine Bewegung ausführen)】。点と点を、順次線が完成するまで正確に【走査する (Abtasten)】ようにして。また、次の垂直線が外にはみ出すような、最後の垂直線まで順次垂直線を【走査する (Abtasten)】ようにして。ここには場所から場所への【自己運動 (Sichbewegen)】の表象が関わっている。(中略) 水平を運動するとき、人は奥行き軸を運動しているのである。」「『基礎概念』第三章段落十七。」

煙突の思考実験が「垂直を奥行きに」翻訳したのと違って、今の(難解な)引用箇所は「水平を奥行きに」翻訳している。最後のくだり、「水平を運動するとき、人は奥行きを運動している」が「奥行き根源性」を意味する。だが重要なのはこの結論ではなく、それに至る推論過程の方である。

この引用文の傍線を付した箇所は、主観が客観にたどり着き、自分をその客観に持ち込む (Übertragung) 運動である。それはいわば「主観が客観になりきる」運動である。

対して【】の部分は、その次に来る運動、すなわち主観が客観に自分を持ち込んだその後で、客観がする運動である。

後者、【】の部分が重要である。なぜなら図式という言葉こそ使わないが、シュマルゾウは【】の箇所図式概念に手を染めるからである。しかもそれは今から示すようにトレンデレンブルクの図式、したがって非カント的な図式である。

(三二) 二元論 (二重図式という演算装置)

シュマルゾウがカントの「図式 (Schema)」をどう理解していたか、それについては資料がないので何とも言えない。そこで役に立つのがトレンデレンブルクの見解である。既に見たように、トレンデレンブルクはカント哲学に対して少なからず批判的であって、カテゴリーの相互翻訳への理解が欠けているといつて、カントを厳しく批判したのであった。しかしよく考えると、カントは「翻訳的なもの・越境的なもの」をことごとく排除した訳ではない。「図式」が良い例である。カントは図式に、本来、越境不可能な悟性と感性の境界を超える機能を許したが、そのとき彼は原理相互の「翻訳」を認め

たことにならないだろうか。

トレンデレンブルクは『論理学研究』でカントの図式に微妙な批判をしている。「私は「カントの」図式を否定しない。カテゴリーの随伴的な像 (Bild) を否定しない。それどころか、抽象から具体的に達し、概念を適用可能にするには必ず図式が要る。しかし如何わしいのは図式の出自 (Entstehung) である。純粹悟性から生まれるカテゴリーが純粹構想力を身にまとうとは信じがたい。根本概念を時間という原基に溶かし込めば、概念の適用〔の可能性〕を説明できるといふのも信じがたい。三次元に広がる空間は、一方向に進む時間と違いすぎないだろうか。時間に位置づけられたら、カテゴリーは〔自動的に〕空間に位置づけられるとも言うのだろうか。(中略) むしろこうでなければならぬ。像を産出する構成的運動 (konstitutive Bewegung) がカテゴリーの導出の基礎を成すのだから、カテゴリーには端から図式が備わっている。像と概念は分離できない。カントが弥縫策として図式論を準備した裂け目 (Kluft) なるものが、そもそも存在しないのである。」(『論理学研究』第一巻、三七八頁。傍線の強調は金田。)

トレンデレンブルクはこう言っているのである。カントに倣って図式の存在は認めよう、しかし「構想力による継起的総合」という時間の独裁体制は不当だから、空間にも総合の一半を委ねるべきではないか。そもそも根源にある運動が、時間的にして空間的という二面性を持っている(トレンデレンブルクの根本認識)。しかし図式はその運動に基づくのだから(引用傍線部)、図式も時間的と空間的の二重の図式でなければならぬ。すなわち図式は二重であり、一方に時間的図式、他方に空間的図式があるのだ、と。

ところでシュマルゾウの『基礎概念』を読むうえで気にかかるのが、「発生 (Genesis)」および「発生的 (genetisch)」という言葉である。この場合、我々は彼のこの言葉の用法をトレンデレンブルクのそれから正しく区別しなければならぬ。

トレンデレンブルクによればドイツ哲学に「発生」観念を導入したのは J・G・フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814) である。彼は「発生を哲学に持ち込んだ」とはフィヒテの不朽の功績である」とフィヒテを高評する¹⁶⁾。さてトレンデレンブルクは「発生・発生的」という語を、フィヒテに倣って、「哲学の方法」には使用するのだが(発生的考察という形で)、シュマルゾウはこの先例に倣っていない。シュマルゾウは「発生」という語を使用するに当たって、それを図式に、しかも片方の時間的図式だけに使う。彼において「発生的図式」とは「時間的図式」のことであるが、これはトレンデレンブルクには見られない用語法である。

とは言っても、シュマルゾウはトレンデレンブルクに対する学問的忠誠を捨てた訳ではない。前段の意味でたしかに両者は異なっている。しかし、トレンデレンブルクの「時間図式と空間図式の二重図式主義」に、シュマルゾウが加担することには変わりはないのである。

『基礎概念』には「発生 (Genesis)」という言葉が数回登場するが、トレンデレンブルクが時間図式(継起的図式)に空間図式を対抗概念として立てたように、シュマルゾウも事実上、発生的 (genetisch) 図式に非発生的な図式(に相当するもの)を対抗概念として導入している。(なお、私はここでは、シュマルゾウとトレンデレンブルクに限って、カントにない「時間図式」や「空間図式」という言葉

を使っている。

(三一一)の引用文、つまり語を【】で囲った例の引用文に戻ろう。【】で囲った運動は、主観が垂直線という客観に自分を持ち込んだその後で、その客観が、正確には「客観の振りをした主観」がする運動であった。しかしこの運動は二重性格を帯びている。なぜなら、振りとは言え「客観」である限りでそれは空間図式に従い、他方で、もともと「主観」である限りでそれは時間図式(発生的図式)に従うからである。

そのことは使用される言葉に現れている。【】の枠のなかの「走査(Entlangfahren, Abtasten)」「滑る(Gleiten)」「自運動(Sichbewegen)」は、いずれも主観性と客観性の両方に股がる言葉である。実際、「走査する」、「滑る」は、作用である限りではたしかに主観的だが、同時にこの作用には「客観との相即」という契機が含まれている。なぜなら、進む主観は客観に「沿って(entlang)進む(fahren)」からである。「沿って進む」という行為は、「進む」限りにおいては時間図式に従い、他方、「沿って」と言う限りにおいては空間図式に従う。眼を閉じて、手で壁に触れながら、その壁に「沿って」歩むとき、人は時間図式と空間図式の両方に関与している、と言えは分かりやすいだろうか。そのような発想において、シュマルゾウはトレンデレンブルクの二重図式(時間図式と空間図式の二重性)の思想に合流しているのである。

結論を急ごう。繰り返しになるが、(三一一)の【】入りの引用では、「客観の振りをした主観」は、「主観」であるかぎりで時間的・継起的(発生的)に振るまう。しかし振りとはいえ「客観」である限りで、空間的・同時的(非発生的)に振るまう。これが芸術

学の内蔵する二重の図式であった。

さてシュマルゾウはこの議論を、水平を奥行きに翻訳するなかで登場させている。したがってそれを「一例」と見れば、一般化してこう言えるだろう。一般に、時間と空間の二重図式こそが、原理から原理への、形象から形象への「翻訳」をつかさどる当のものなのだ、と。

まさにこの「二重図式」という仕方ですシュマルゾウはトレンデレンブルクの要請に込めている。十九世紀中葉になされた、「構想力の継起的総合というカントの時間独裁体制に終止符を打て」というトレンデレンブルクの「脱カント的」指令に、シュマルゾウは遅ればせながら(一九〇五年)美学者として応答したのである。

まとめよう。『基礎概念』の論理は時間と空間の二重図式で織り成されている。シュマルゾウが、フィードラー、パノフスキー、ゴンブリチなどのカント直系の芸術学と一線を画すのは、つまり彼が「脱カント的」なのは、まさに図式の二重性ゆえである。(三)の議論は終わった。

第五節 総括

「シュマルゾウ芸術学の哲学的源泉はなにか」という問いに、私はこう答える。第一に彼は、ライブニツから「運動による学問の一元的構成」を取り入れている。第二に、トレンデレンブルクから「原理相互の翻訳・移行・変換・交替」という演算装置と、「翻訳を司る二重図式」という証明装置を借りている。第三に、直接のコメントこそないが、トレンデレンブルク経由で、キーネーシスがアリス

トテレス哲学で果たした二重の役割を自らの「二重図式」に付与している。

以上がシュマルゾウ芸術学の三源泉である。だが源泉は実はもう一つある。シュマルゾウ芸術学はカント美学の変異体、ミュータント (mutant) である。なぜならシュマルゾウはカントに倣って「構想力による総合」を奉じつつ (マクロ)、カントに抗って「運動原理」

を追加装備 (ミクロ) したからである。カントはシュマルゾウ芸術学の0番目の源泉である。

シュマルゾウ芸術学の扉は、この三つまたは四つの山を持つ鍵でなければ開かない。フィードラーやパノフスキーなどカント直系の鍵を使っても、それは開かない。

註

- (1) Die Kunstwissenschaft der Gegenwart in Selbstdarstellung. Hrsg. Johannes Jahn, Leipzig, Felix Meiner, 1924.
- (2) Kants Analogien der Erfahrung. Berlin, Weidmannsche Buchhandlung, 1876.
- (3) 学位論文 Leibniz und Schottelius. 1877. 第一章のみ現存。
- (4) 『ラッピンツ著作集』、澤口昭章、工作舎、一九八八年
- (5) 哲学の分野でプロイセンとチェコを結ぶ当時もとても優れた人脈は、ヴューレン大学出身で天折のプラハ大学教授 Franz Seraphin Exner (1802-53) だった。Exner の手記を参考。Frankfurter, Salomon; Graf Leo Thun-Hohenstein, Franz Exner und Hermann Bonitz, Wien, Alfred Hölder. 1893.
- (6) Petersen, Peter; Die Philosophie Friedrich Adolf Trendelenburgs: Ein Beitrag zur Geschichte des Aristoteles im 19. Jahrhundert, Hamburg, Boysen, 1913.S.5.
- (7) たとえば『論理学研究』, Bd.II.S.63.
- (8) Beiser, Frederick; Late German Idealism. Trendelenburg and Lotze, New York, Oxford University Press, 2013.
- (9) 文芸理論で哲学を構築する試みは、友人の文法学者 Karl Ferdinand Becker (1775-1849) の影響によるという説がある。
- (10) ジョルジュ・ディディエールマン、『イメーシの前で』、第三章、江澤健一郎訳、法政大学出版局、二〇一二年
- (11) ヴューレン大学でリーグルを指導したのは、ヘルバルトの弟子、フォン・ツインメルマンであった。リーグルの哲学的背景については Gubser, Michael; Time's Visible Surface, Wayne St. Univ. Press, 2006.
- (12) 日本語で J. v. シュロツサー、『美術史「ウィーン学派」』(細井雄介訳、中央公論美術出版、二〇〇〇年)。
- (13) トレンデレンブルクのヘルバルト派攻撃は下記を参照。Trendelenburg; Historische Beiträge zur Philosophie, Berlin, Bethge, 1867. Bd.3. ヘルバルトの空間論の最終形態は次の資料で押やん(Manne)がである。Herbart, Johann Friedrich; Psychologie als Wissenschaft, Königsberg, Unzer, 1825. 二〇九節から一一六節、および付された「注 (Anmerkung)」。
- (14) ちなみにエルンスト・カッシーラーの『認識問題3』(須田朗ほか訳、みず書房、二〇一三年)の第5章は、ヘルバルト哲学の紹介として優れている。
- (15) 十九世紀初頭、フランシス哲学はすでに身体に立脚する高度の人間学を生んでいた(たとえばメーヌ・ド・ブラン (Maine de Biran, 1766-1824))。それと比べて、十九世紀のドイツ語圏の哲学が終って身体概念に対して消極的あるいはむしろかすると自制的であった理由と背景については、別の論考に委ねざるを得ない。
- (16) Bemerkungen. Rhythmus in menschlichen Raumgebilden. 本論文は以下に所収されている。Zeitschrift für Ästhetik und allgemeine Kunstwissenschaft, Stuttgart, Ferdinand Enke, XIV.1920. Trendelenburg; Zur Erinnerung an Johann Gottlieb Fichte, Berlin, Druckerei der Königl. Akademie der Wissenschaften, 1862. アンデレンブルクが見ているのはおそらくフントラの次の遺稿。Über das Verhältnis der Logik zur Philosophie oder transcendentalen Logik, 1812. たとえばその一五一頁を参照。なお本遺稿は下記に所収されている。Gottlieb Fichtes Nachgelassene Werke, Bonn, Adolph Marcus, Bd.I.1834.